

サイトの更新

作成したサイトデータは最終的に公開サーバにアップロードする。アップ前にはサイト全体のチェックは欠かせない。GoLiveにはサイト全体をチェックする機能と、更新作業、ならびにサイトとローカル間でのデータのやりとりを効率化する機能も搭載している。

KEYWORD

サイトレポート機能

差分アップロード

修正したアイテムをアップロード

サイトチェックと
データの送受信

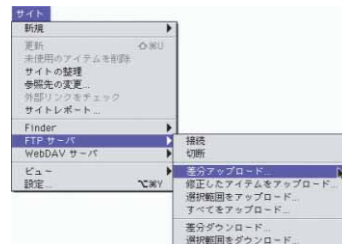
1 サイトの細かい状況を調べる

Webサイト内には、個々のWebページに含まれるリンク、画像などに関する膨大な情報があり、それらを把握し、確認することがサイト管理の第一歩ともいえる。サイトメニュー「サイトレポート...」で開く「検索」ダイアログでは、1ファイルに行う一般的な文字の「検索・置換」だけでなく、複数ページやサイト全体を通した広範囲にわたるチェック作業ができる「サイトレポート」機能も備えている。HTMLの構文チェックやリンクエラーのみではなく、同タブ内にはファイルサイズ、ダウンロード時間を確認できる「ファイル情報」[] ありがたいミスである、ページタイトルが「Welcome to Adobe GoLive 5」になったままのページなどを探してくれる「エラー」のタブがあり、かなり詳細なサイトチェックが可能だ。さらに、「サイトオブジェクト」タブでは使用コンポーネントのチェックやフォントセットの検索も行うことができる。「リンクチェック」は張られたハイパーリンクの確認が可能になっている。これらをチェックした結果は、「レポートの結果」ウィンドウで表示される。公開する前に、これらのチェック機能を利用して、まちがいのないサイトをアップロードするようにしよう。



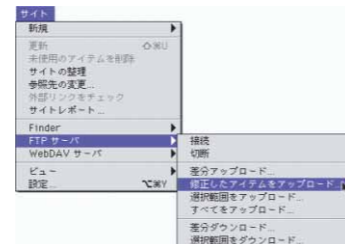
2 差分アップロード

Vol.1で解説したFTPを使用した公開サーバとのデータのやりとりでは、差分ファイル(サーバとローカルで更新日時が異なるものや、新たに作成されたファイルのこと)のアップロードとダウンロードができるようになっている。サイトメニュー「FTPサーバ」「差分アップロード...」を使用すれば、ローカルにある最新ファイルを自動的にサーバにアップロードしてくれる。また、サイトメニュー「FTPサーバ」「差分ダウンロード...」では、複数の環境でWebサイトを構築する際に発生する、「サーバ側のファイルが最新」のときに対応できるように、サーバ側にある日付が新しいデータを差分ファイルとしてダウンロードしてくれる。



3 修正したファイルのみ更新

さらに、サーバメニュー「FTPサーバ」「修正したアイテムをアップロード...」では、ローカルでGoLive内で修正されたファイルのみをアップロードしてくれる。こちらもわざわざ更新したページを覚えておくことなく、オートマチックに更新作業が行えるので非常に便利な機能だ。ただし、GoLive以外で更新したファイルはアップロードされない。



サイトレポート機能
差分アップロード
修正したアイテムをアップロード

KEYWORD

ソースコードの編集

GoLiveのようなWebページ/サイトエディタの登場により、テキストエディタ上でしかソースを作成・修正する機会は少なくなったといえる。ただし、ソースが存在する以上、微調整などのソース上での編集作業は発生する。

KEYWORD

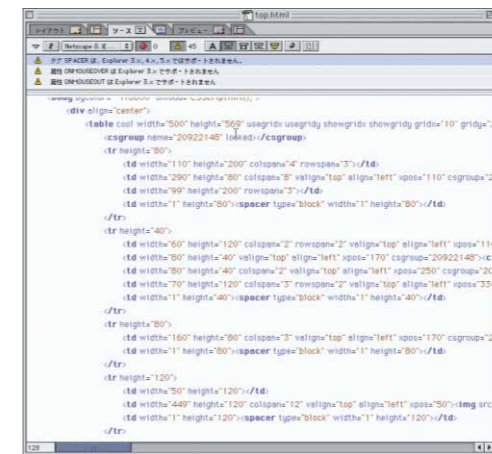
ソースビュー

ソースウィンドウの設定

多様な機能をもつ
ソース編集機能を使いこなす

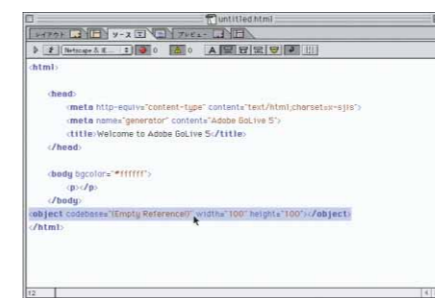
1 ソースウィンドウ

「ドキュメントウィンドウ」上部にある「HTMLソースエディタ」タブをクリックすると表示される「ソースビュー」では、テキストエディタを使用する感覚で、編集作業をサポートする機能により、柔軟なソース編集が行える。



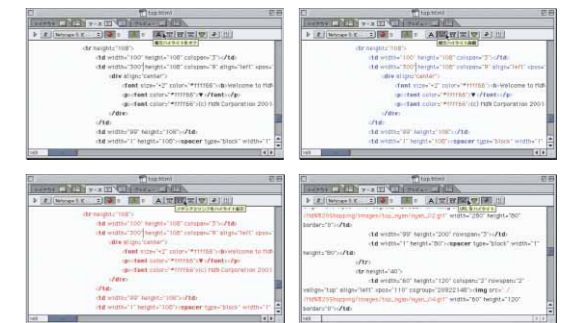
3 ソース上に直接エレメントをドラッグ&ドロップ

ソース編集が直接行える「ソースビュー」だが、タグなどを打つのはやはりめんどろだ。しかしGoLiveでは、「オブジェクト」パレットから直接、<HR>などのHTMLオブジェクトをドラッグ&ドロップできる。



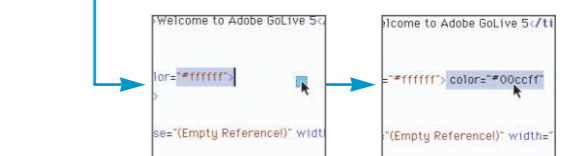
2 ソースに準拠したハイライト表示

ソース編集は多数のタグが書き込まれたテキスト上で行われる。膨大なタグ、細かい数値などは、くっついて見やすいとはいえず、ソースを見慣れていないユーザーには非常に取っつきづらいもの。GoLiveのソースエディタでは、「構文ハイライト」により、任意のハイライト表示を行うことができる。「構文ハイライトオフ」ボタンはハイライトがない表示。「構文ハイライト詳細」ボタンは、タグと設定内容をハイライト表示。「メディア&リンクハイライト」ボタンは配置された画像などのメディアをハイライトする。「ハイライトURL」ボタンはURLへのリンクが張られた部分をハイライト表示する。このほかにもサーバ側コードをハイライト表示にする「サーバ側コードをハイライト」ボタンや、行の折り返しを設定する「ワードラップ」など、ソースをじかに編集する際に作業効率を高める表示変更が可能だ。



4 カラーモードドラッグ可能

さらに、「カラー」パレットから色のデータを配置することもできる。さらに、「ソースビュー」には、STEP 6で紹介した「構文チェック」機能も搭載されている。今まで「ソースが汚くなる」「じかにソースを操れない」などの理由から、昔からWebデザインを行ってきたユーザーに不評だったWebデザインツール。しかし、GoLiveのきめ細かなソース編集機能は彼らのWebデザインツールに対する認識を覆すものだ。ぜひ一度触ってみてほしい。



カラーパレットの活用

ソースビュー
ソースウィンドウの設定

KEYWORD

ロールオーバーを使用したバナーの作成

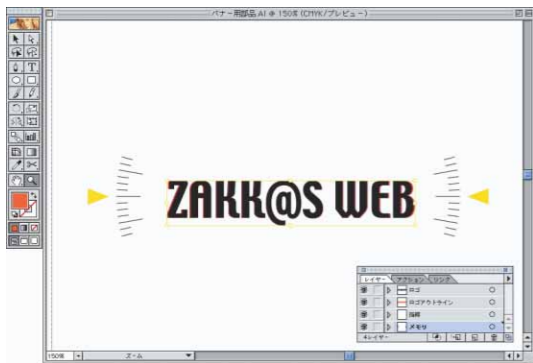
最近、高度なインタラクティブ性やサウンド効果を取り入れた、Flash ファイル形式(.swf)のWeb ページをよく目にする。そこで、今回は LiveMotion を使用し、通常のバナーでは少し作業が複雑な、複数のURLへジャンプするswf形式のバナーを作成した。

KEYWORD ロールオーバー

ロールオーバー効果と
複数のリンクを内包したバナー

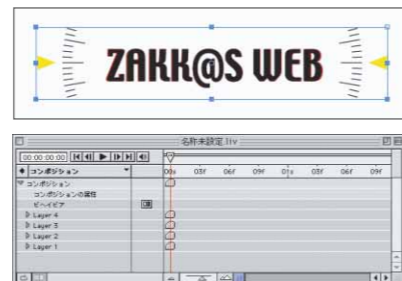
1 Illustratorで素材をつくる

今回作成するバナーの基素材はIllustratorを使用して、リンク用のバナー素材となる画像を作成している。LiveMotion側で各素材の編集をするためレイヤーは4つに分かれている。バナーということで、矩形オブジェクトという表示エリアを意識したうえでの素材作成を心がけている。また、IllustratorのレイヤーはLiveMotionに配置した際、レイヤー構造をそのまま読み込むことができる。動作ごとにレイヤー分けするなど、レイヤーによる作業の効率化も意識したい。



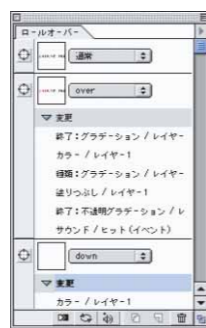
2 LiveMotionに読み込む

素材画像ができたならLiveMotionで新規コンポジションを作成、ファイルメニュー「配置...」で保存してあるIllustratorファイルを、LiveMotionの書類上に配置する。この時点で、タイムラインメニュー「タイムラインウィンドウ」の表示で「タイムラインウィンドウ」を表示すると、オブジェクトがひとつにまとまってしまう。これを分割するには、オブジェクトメニュー「レイヤーを分割」「オブジェクト」を適用する。これでIllustratorで作成したものと同じレイヤー構造でタイムライン上にオブジェクトが展開される。ここでのレイヤーは4つ。ちなみに、バナー下に3つある各媒体のタイトルはLiveMotionの文字ツールで作成する。



3 4つのロールオーバーを設定

このバナーは、通常Webページ上にある場合は、単純な動きのバナーと変わらないが、ユーザーがポインタをバナー上にもってくると動き出すという仕掛けをもっている。まず、「ロールオーバー」パレット下部にある「新規ロールオーバースタート」ボタンを押して、「ロールオーバースタート」を作成し、プルダウンメニューでポインタがオブジェクト上にくると反応する[over]に設定する。これは、「NEWS」、「PRODUCTS」、「MEMBER」へとジャンプする各タイトルにポインタが乗ると、それぞれが動くように、4つの場所へと設定する。さらに、クリックしたときの[down]も設定しておく。通常であれば画像ごとにクリックマップとしての設定をしたりと、作業がめんどろだが、LiveMotionで素材のレイヤーを利用することによってかなり効率アップする。

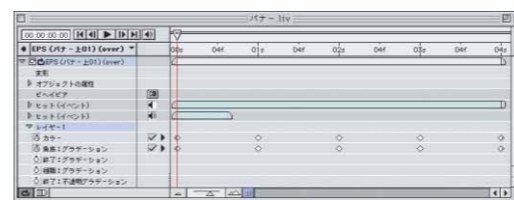


LiveMotionで素材をつくる際のコツ

IllustratorやPhotoshopのレイヤーを利用してデザインを行う場合、LiveMotionにオブジェクトやシーケンス別で素材を読み込ませると、効率的なWebアニメーション作成が可能となる。ただし、不要なレイヤーは最初から統合しておくか、削除しよう。余分なレイヤーが残っていると、ファイルが重くなるなど不都合がある。データを軽くするように努めることをお勧めしたい。

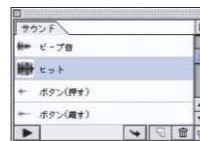
4 色と透明度の変化するアニメーション

ロールオーバーの設定がすんだら、実際の動きを作成する。このバナーのアニメーションはロゴと背景イメージがアニメーションする。双方とも内側でグラデーションが回転するアニメーションをタイムラインで設定して作成している。図は「ZAKK@S WEB」内のグラデーションと、その動きを設定してある「タイムラインウィンドウ」。



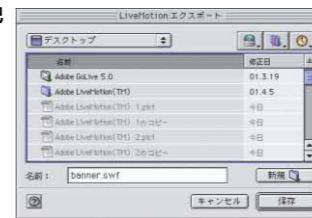
7 サウンドも埋め込む

さらに、リンクが埋め込まれた部分にポインタが乗ったとき、クリックしたときにサウンドが鳴るようにしてみる。乗ったときにサウンドを鳴らす設定は「ロールオーバー」パレットで、[over]に設定されている部分を選択、「サウンド」パレットから鳴らしたいサウンドを選択して、パレット下部の[サウンドの適用]ボタンを押せば設定完了。



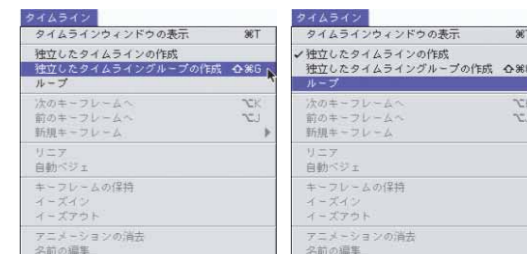
8 Flashファイル形式(SWF)を書き出しWebページに配置

最後に選択範囲をファイルメニュー「エクスポート」でswf形式を選択して書き出す。続いてGoLiveに移り、「サイトウィンドウ」上で配置画像をひとまとめに保管する「images」フォルダに作成したswfファイルを追加し、ページへの配置作業を行う。



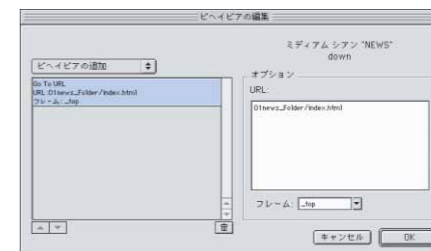
5 ロールオーバー時にアニメーションをループ

ポインタが上にあるロールオーバー状態のときにアニメーションがループする動きも設定する。ループさせるには、ループさせたいアニメーションを選択した状態で、タイムラインウィンドウメニュー「独立したタイムライングループの作成」→「独立したタイムライングループの作成」→「ループ」の作成を行ったのち、「タイムラインウィンドウメニュー」「ループ」という作業を行い、ファイルメニュー「プレビュー」で任意のブラウザにて確認する。



6 クリックすると指定したURLにジャンプ

このバナーにはクリックすると前述の4つのページへジャンプするリンクを含ませる。リンクの設定は「ロールオーバー」パレットの左下にある「ビヘイビアの編集」ボタンを押し、「ビヘイビアの編集」ダイアログ上で「ビヘイビアの追加」ポップアップメニュー「Go to URL」を選択、[URL:]にそれぞれの場所のURLを打ち込む。このときの「スタート」は「over」ではなく、「down」状態を作成してから作業することに注意。



ダイナミックリンクを使ってデータベースと連携したサイト構築

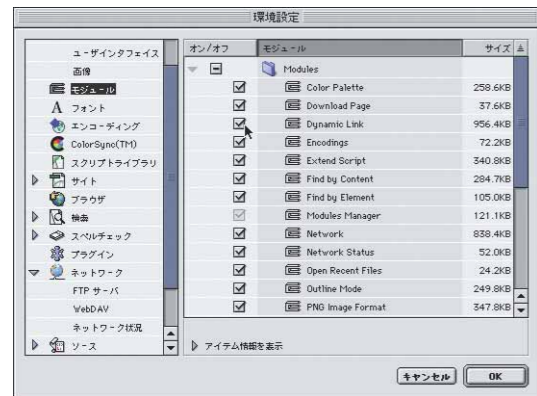
ユーザーが高い興味をもっているeコマースサイトは、たいていバックエンドにデータベース技術を採用している。GoLiveダイナミックリンク機能は、動的なデータベースを活用するサイトを、ASP技術を利用し、直感的に編集・関連づけ・プレビューを可能にする。

KEYWORD ダイナミックリンク

G o L i v e で
動的なWebサイトを作成する

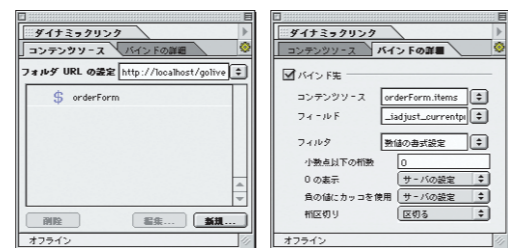
1 動的なWebサイトとは？

ユーザーの要求に応じて表示内容が変わったり、ひんぱんな更新が必要となる、eコマースやニュースページは、データベースと連動して内容が更新される、動的なWebページ作成が必要となる。GoLiveでは、ASP¹技術を利用してODBC²準拠のデータベースと作成したページを関連づけ、動的なWebサイトを作成できる「ダイナミックリンク」機能を搭載している。「ダイナミックリンク」に関する機能は編集メニュー「環境設定...」を選択すると開く「環境設定」ダイアログの「モジュール」で、「Dynamic Link」にチェックすることで使用可能になる。



2 簡単にダイナミックリンクを配置する

「ダイナミックリンク」機能は、特別なプログラミング技術を覚えることなく、eコマースサイトで使用されている「ショッピングカート」などを作成できるモジュールが用意されている。テンプレートをGoLiveで作成し、「ダイナミックコンテンツ」を「ダイナミックリンクパレット」で制御し、ショッピングカートの中身や、決算処理などを実行できるWebコンテンツが作成できる。ただし、GoLiveのメインであるWebページデザインツールとしての機能に比べ、より深いサーバやデータベースに関する知識が必要とされる。



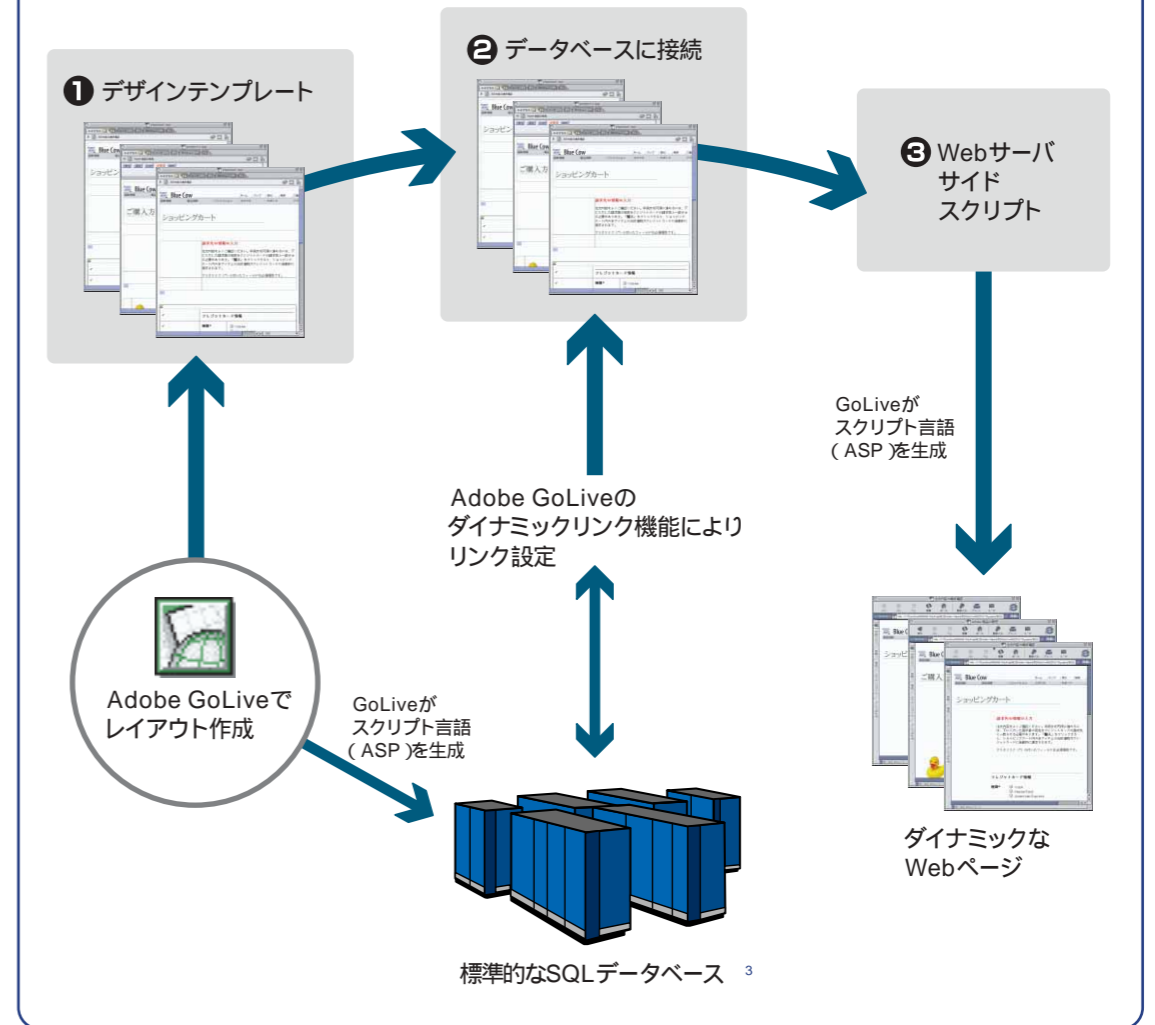
3 一歩進んだWebページ作成

GoLiveが搭載している「ダイナミックリンク」機能は、今まで細かいプログラミングで処理していた、データベースを利用した動的なeコマースサイトをGoLive上で制御・作成できる画期的な機能だ。ぜひ一度実際にGoLiveに触ることによって、次なるステップである、アクティブなWebページ作成を体験してほしい。



図はGoLiveのデモサイト

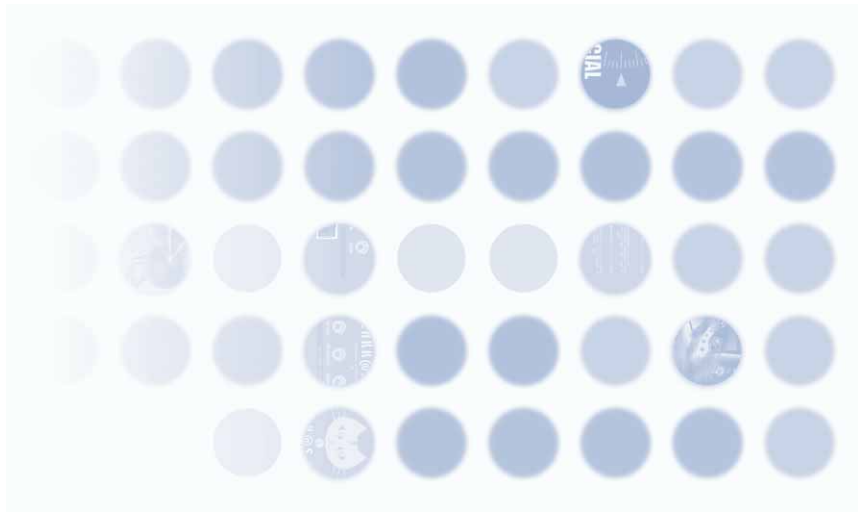
Adobe GoLive ダイナミックリンクのワークフロー



註
1 Active Server Pages
データベースと連携した動的なWebページを作成することができるHTMLの拡張機能。Microsoft社が提供するWebサーバであるIIS(インターネットインフォメーションサーバ)で用いられている。

2 Open Data Base Connectivity
Microsoft社が提唱する、データベースサーバへとアクセスするための共通API仕様。

3 Structured Query Language
IBM社が開発したりレジャーショナルデータベースの操作に使用する。アメリカ規格世界標準規格の言語。



Adobe GoLive & LiveMotionではじめよう!
WEBデザイン・メイキングブック vol.3

株式会社エムディエヌコーポレーション 特別付録小冊子

発行 株式会社エムディエヌコーポレーション
〒102-0075 東京都千代田区三番町20番地
www.MdN.co.jp

発売 株式会社インプレスコミュニケーションズ